

万葉集と遠隔授業と防災情報

先日、万葉集を題材とした本を読んだ。万葉集は、奈良時代後期に大伴家持らによって編纂された歌集として知られている。皇族や公家から庶民まで様々な人々が作った歌が、たくさん収められている。当時は、この歌で自らの思いを伝えていたようで、歌のやり取りは人々のコミュニケーションツールとして、広く定着していたのかもしれない。歌は、短いながらも、選ぶ言葉によって描く情景が異なり、それがわかるかどうか、共感できるかどうかで心情をやり取りするため、お互いに高度な解釈の能力が必須の情報伝達手段であった。表向きの内容を理解するだけでなく、言葉の裏の意味を推測できる教養が必要で、わかり合える者同士でなければ、コミュニケーションを取ることができなかった。いわば暗号化された情報交換手段でもあったため、当人たちだけにわかるように伝えることができた。二人だけの秘密という、お互いの関係性を特別なものへと高める効果もあり、つながりを深めることが可能になる巧みな手法でもあったのではないだろうか。

いつの時代においても、人と人が社会を営むには、意思を伝え合うコミュニケーションが必要である。昔は、紙に書かれた手紙が主流であったが、最近は、どんどん短い方法になってきている。技術の進展により、電話、ポケベル、メール、ツイッター、LINE と様々な情報伝達手段が開発されてきて、情報の中身も、記号化され単純化されてきた。最近では、一文字「ま」だ

けとか、イラストのみを送ることもあり、それでもちゃんと気持ちが届けられ、裏の事情を汲み取ることも可能である。一方で、KY（空気が読めない）という文化も残っていて、それが、一文字で伝えられるのだから、人類のコミュニケーション技術は、どんどん進化しているのかもしれない。

そうはいっても、顔を見ないと気持ちが本当に伝わっているのかどうか、やはり不安になる。いやおうなしに、この4月から始まった遠隔授業に関してもそうであった。ネット越しでは、学生たちの反応がわかりにくいのでは、という懸念からである。教員たちにとっては、新たな準備が加わり、対応に大わらわであったが、受講する学生たちにも戸惑いが多いのだろうと想像していた。小人数で行うゼミでは、お互いの顔を見ながらの議論も可能であるが、大教室で行う講義形式の授業であると、一方的にスライドを表示して話すだけになることが多い。みんな、カメラの画像を切ってしまうので、こちらには存在そのものがわかりにくい。しかし、オンライン授業に対する学生たちの声が聞こえてくると、どうやら好評なのである。理由は、移動しなくて良いとか、身だしなみに気を使わなくて良いということなので、ずぼらな性格の人にとっては楽なのかもしれないと、勝手に納得していた。それでは怠惰な毎日になってしまう、生活が乱れてしまうのでは、と懸念し

ていたが、詳しく聞いてみるとそうでもないようであった。学生たちによれば、最初は、そんな解放感もあったが、決められた時間に授業が始まるため、徐々に生活リズムが整ってきたそうである。課題が毎回のように出されることで、逆に時間が足りなくなってきたと答えている。もちろんみんなが自律できているわけではなく、ネット環境や同居者との関係、学生同士のつながり等に問題が無いわけではないが、コロナ以降も続けてほしいという歓迎の声の方が多いのである。

とはいえ、そのような環境における学生とのコミュニケーションに、私は不安を覚えていた。興味をもって聞いているのか退屈なのか分からないので、教室の雰囲気がつかめなく、うまく授業を進められているのか心配であった。一方、学生たちは、チャットを使えばタイミングを気にせず質問が書けると喜んでいる。SNSを用いたコミュニケーションが当たり前の学生たちにとっては、これが普通なのかもしれない。この方が、場の雰囲気を気にしなくて良いと利点ととらえる学生もいる。我々が知りたいと思っているのとは逆に、学生たちは気楽であると感じているようである。空気を読まなければいけないという雰囲気こそ、彼らが社会に出たくなる原因なのかもしれないから、それがない環境を歓迎しているのであろう。独りぼっちは不安なので、みんなと一緒に良いという感覚と同時に、それぞれの個人が心地よい環境というものが、でき始めているのかもしれない。これは、私の予想をはるかに超えていて、新たな授業のあり様、新たなコミュニケーションの形態が芽生えてきそうである。

これまで、コミュニケーションは、距離を隔てた人が、その距離に応じたお互いの約束事やルールに従って、気持ちを伝え合うものであると思っていた。万葉の和歌でも現代のSNSでも同様であろう。ルールに従うと、そこでのやり取りは統一され、仲間意識や一体感が芽生え、秩序を保つことができた。一方で、それを窮屈に感じる人もいたかもしれない。ルールの遵守に縛られてしまうと、新たな観点や別の意見が認められず、異なる考え方が排除されてしまう。現代の歌でも、その歌を聞いて思い浮かべるものが、十人十色であることを知っている。作者が歌に込めた気持ちに対して、感じ方は人それぞれであって、何かを強要するものではなく、歌の聴き方は人によって異なる、ということが認められている。たとえ形式が統一されていたとしても、画一的に見るのではなく、もっと余裕を持ったとらえ方ができた方が、より多くの考え方を受け入れることができる。

「防災に関する情報」もそのようなコミュニケーションの一つである。防災情報とは、最善の行動を人々に正確に伝えるものだと思っていた。そして、情報を得た人は、みんなが同じ行動をとるべきであると考えてきた。しかし、同じ防災情報を聞いたとしても、その後の行動は、人それぞれなのではないだろうか。津波警報や洪水警報を聞かされても、動かない人がいるかもしれない。そこには、情報を受け取る側の事情も影響しているはずである。突然発せられる防災情報を、誰と一緒に聞いたのか、どんな体調や心境の時だったのか、どんな場所にいたときなのか等、環境や状況は様々である。人によって、その後の行動が変わるのは、当たり

前なのではないだろうか。

情報のとらえ方は一つではない、ということ
を理解しているつもりであったが、もっと丁寧
に情報を出す必要があると思う。受け取る側
にとって、その時、必要となる情報を過不足なく
的確に伝えることが、より良い防災情報の提供
なのであろう。そのためには、情報を受け取る
側の状況に応じて、伝えるべき情報を変えてい
かなければならない。例えば、スマホを持って
いれば、その持ち主の情報がそこには記録され
ている。年齢や体調や普段の行動などから、ど
の程度の身体能力が期待できるのかがわかる。
そして、スマホは位置情報を取得できる。大地
震が発生したとき、その人の近くの揺れのデー
タを知ることができる。さらに、周辺で発生す
る火災、避難所の環境もわかるため、その人
に向けたその人だけの行動指針を示すことがで
きる。そのためには、状況把握のためのセンサー

を周辺にたくさん設置し、そのデータを集約す
るネットワークの開発、そして、それぞれが最
善の行動をとるための個別の行動指針の検討が
必要になってくる。

これまで、地震がどこでどのようにして起き
るのか、地下の動きばかりを研究してきた。地
震の発生は、単純ではない。地震の起き方は、
地域ごとに大きく異なり、時間変化もするた
め、定量的にわかっていることが、ほとんどな
いからである。地震の解明だけでは、被害を減
らすことは難しいので、これからは、地震など
の災害情報をどう伝えるべきなのか、どのよう
な行動を引き起こすことになるのかといった地
上の人々の動きを探究したいと考えている。地
震も多様であった。そんな人の受け止め方の多
様性を意識して、実際の行動につながる情報伝
達を模索するのも良いかなと思っている。



酒井 慎一（さかい・しんいち）

【専門】地震学、防災情報、稠密観測

【主たる著書・論文】

首都圏地震観測網の設置計画，地震研究所彙報，2019.

Multi-fault system of the 2004 Mid-Niigata Prefecture Earthquake and its aftershocks, E. P. S., 2005.

地震活動から見た三宅島 2000 年噴火時のマグマの移動，地質学雑誌，2001.

【所属】東京大学大学院情報学環 総合分析情報学コース

【所属学会】日本地震学会、日本建築学会